

## 『1941年。パリの尋ね人』

2014年12月13日

今年のノーベル文学賞は『1941年。パリの尋ね人』を著したパトリック・モディアノが受賞した。上記の著作は小説ではなく、ドキュメンタリーである。

著者モディアノの父はユダヤ人で、ナチス占領下のパリで闇のブローカーをし、辛苦を舐め尽くして生きた人である。1945年生まれの彼は「私は占領時代の汚物から生まれた」と言っている。この出自から、彼の著作は占領下の人間を描いたものが多いらしい。幾多の文学賞を獲得し、「生きている最も偉大なフランス作家」と言われ「モディアノ中毒」という言葉があるほどの作家である。

『1941年。パリの尋ね人』も絶賛された。モディアノは、ある時、1941年12月31日付の古新聞の「昨日今日」という欄に目がとまった。「パリ 尋ね人。ドラ・ブリュデール。15歳、1歳55、うりざね顔、目の色マロングレー、… オルナノ大通り41番地、ブリュデール夫妻宛情報提供されたし。」という両親による娘を捜す広告である。モディアノはこの広告のドラという少女に関心を持ち、10年を費やして、追い求める。半世紀もの前のこと、しかも、全く無名の少女である。尋ね、探しようがないと思えるが、執拗に追いかけて、ドラに関する資料と写真を探り当てる。歴史と文字を執拗に追いかけて聖書を書き残したユダヤ人の血筋を感じる。

ドラの両親はユダヤ人で、父はウィーンで生まれ、フランス外人部隊に入隊する。ドラはパリのユダヤ人が多く住む町で生まれ、育つ。気の強い反抗的な少女だったという。貧しい家庭の子どもたちが多かった、キリスト教系の寄宿学校「聖心マリア学院」に入学するが、15歳の時、学院から脱走する。この時、両親は上記の「尋ね人」広告を出したのである。母の所に戻ったり、また脱走したりする。町中で捕えられ、ドラランシー収容所に移送される。父も逮捕され、ドラは父と共にアウシュヴィッツに送られ、ガス室で殺される。

ドラが何を考え、何に悩み、脱走して、パリの寒い冬をどのように過ごしたのかも分からない。ただ、何枚かの彼女の写真に、喜びはなく、堅い表情だけが残っている。自分の生を受け入れられなかったのではないか。モディアノはドラを追いかける中で、ユダヤ人の苦悩に出会う。その報告が圧巻である。ユダヤ人であるという理由で逮捕され、強制収容所に送られる。残された古い資料から多くの手紙を発見する。「総監様 以下に申し上げます件について、ご検討いただけましたらとても幸いです。両親は老齢のうえ病身でございますが、ユダヤ人でございますので最近逮捕されました、そのため、わたしと妹だけが残されてしまいました。…」家族の釈放を求める悲痛な手紙の一つである。

モディアノは占領下のユダヤ人に関心を持ち「押し殺された大きな叫び」と評されたこのドキュメンタリーを著した。彼は、錯綜、混乱した時代の後、忘れ去ろうとする社会に疑義を持ち、ドラに焦点を当てたのではないか。フランスで1964年、時効のない「人道に背いた罪」という法律が制定された。1970年代以降、ナチズムに協力してユダヤ人を絶滅収容所に送ったことにフランス当局が参与した責任が問われるようになった。1996年、「モーリス・パポン裁判」で、戦後、予算相までしたパポンに禁固10年の判決が下された。この裁判を報じた「ル・モンド」紙は日本について「連合軍による東京裁判以外、戦争犯罪を問う裁判は一切なかった。『パンドラの箱』は閉ざしたままにしておきたいようだ」と評している。翻訳者の白井成雄氏は「事実を正確に捉え、裁くべきことはきちんと裁く… こうした筋道を通してこそ… 己れに自信と誇りを取り戻しうる」と書いている。